

# 日本におけるキリスト教の歩み

## その4 教会の再出発と学校教育活動-3

明治時代

1868年  
切支丹邪宗門  
禁制  
1873年撤去

\*因みに\*  
1858年慶應  
義塾大学  
1877年東京  
大学  
1897年京都  
大学

プロテスタント教会について:江戸時代の初めから鎖国時代を通じてオランダやイギリスからプロテスタントの宣教師も来訪していた。しかし彼らは幕府の迫害を恐れ、その存在を一切現さなかった。彼らの存在が露見したのは、ペリーの黒船伝来時、船内で礼拝する姿を日本人が発見した時であった。領事ハリスは熱心に新政府と条約締結の際、布教の許可取得に努力した。1859年条約は締結され承認を得ると各宗派のプロテスタントの宣教師が来日。しかし、新政府は日本人への布教を許可しなかった為、彼らは医者、教師など他の活動を試みたが、あまり効果を得なかった。漸く宣教活動を始められたのは、「浦上四番崩れ」の終息時でした。彼らの宣教活動の特色は二つ①**教育事業**;1874年立教大学、青山学院大学、明治学院大学&1875年同志社大学がある。②**バンドと呼ぶ青年の活動グループ**(教育活動の実り);特に熊本バンド、神戸バンド、北海道バンド(新渡戸稲造、内村鑑三)が有名である。このバンドの活躍で信者数は増加した。

1891年カトリック教会に位階制ヒエラルキア、東京を大司教区、他代牧区(長崎、大阪、北海道)を司教区として成立。しかし、一方でこの頃から信徒数が減少した。その要因は、政府側の「信教の自由」に対する極端に狭い解釈であった。1890年教育勅語発布、国家神道確立の為、政府役人はキリスト教の学校教育の道を妨害した。国民にも政治がらみで外国人宣教師や教師への興味を喪失させた。産業立国を目指す日本は、アジア諸国に対し身勝手な振る舞いと愛国心からか、キリスト教に対して国民の目を封じる策を図る。その激変する日本社会でパリ外国宣教会の宣教師たちの活躍は、九州、山口、島根・津和野と萩の殉教地まで及んだ。1905年カトリック信者数は、58,000人とされる。

1872年プチジャン司教は女子教育の為、**サン・モール会**横浜修道院&2年後**雙葉学園**創設、**シヨプアイユの幼きイエズス修道会**長崎南山手、**シャルトル聖パウロ修道女会**白百合学園等を招聘していた。また「旅」から帰った岩永マキ等は、ド・ロ神父指導のもと**社会福祉施設**と**幼児教育**を創設。長崎の十字会と呼ばれ、現在**おかげのマリア修道会**の先駆・女部屋が県内各地で活躍した。1889年オゾーフ司教依頼の**マリア会**は東京に**暁星学園**、この頃既に93校4,780名程の生徒がいた。しかし、日本国の教育勅語発布以降その数は激減、カトリック教育施設26校となった。にもかかわらず、教育事業の修道会が次々に来日し、日本社会へ大きな影響を与えた。1908年教皇ピオ10世の意向により遂に**イエズス会**は日本へ帰還、東京に**上智大学**創設。**聖心会**も同年**聖心女子学院**開設した。

大正時代

1912

プロテスタント教会合同し  
日本基督教団

1926

国家神道、軍国主義の支配からキリスト教は1890年~1941年の52年間に渡って、全ての活動も厳しく、更に日本国における存在そのものが危機となった。一方、日本に上陸した各修道会は、漸次日本人会員を受け入れ始めた。司教区は4つの教区に、また更に2つの代牧区を誕生した。日本の各々地域を修道会が担当。四国は**ドミニコ会**、新潟は**神言会**が担当した。第一次世界大戦後(1919年)、教皇ベネディクト15世は日本へ教皇使節を必ず派遣した。そのバチカンの存在感は、日本の教会とローマの関係を切ろうと狙う日本国政府から安全に守った。1927年日本初の邦人司教**早坂師**が叙階、長崎の司教に任命された。その後、早坂司教指導により**長崎純心聖母会**が誕生。後に**アウシュビッツ**で命を捧げた**コルベ神父**は、長崎で**コンベンツアル聖フランシスコ会**を創立。

1891年司教区

長崎クーンザン司教

東京オゾーフ司教

大阪ミドン司教

函館ベルリオ

18人日本人司教

後継コンバス司教